



一

その馬車は風変わりな形をしていた。四輪の小振りのものだが、御者台の後ろには鉄板で囲まれた箱が設えてある。箱といっても只の方形ではなく七角形の小さな堂のような奇妙なもので、側面に小さな扉がついていた。その扉も鉄製で外側から鎖と錠前で厳重に封じられていた。錠で止められた鉄板には白い絵の具で呪文らしきものが何ヶ所にも書きつけられている。囚人を送り届ける仕事だと聞かされていたが、中にいるのは只者ではなさそうだった。

路銀が尽きかけた私は、アズコックの街でこの仕事を引き受けた。実入りが良く、行き先も向かおうとしていた西の街ラングードで都合良かった。金は前払いで半額、無事到着したなら、残りの半額が支払われることになった。

囚人はこのあたりの森に出没する野盗の一味で、頭目かそれに近い者らしかた。一行は十四五人、隊長を務めるアプスタルという男と数名はこの地を治めるゼクセナン大公配下の者だが、それ以外は私同様金で雇われた男たちだった。

ゼクセナンの新しい砦があるラングードへの道は深い緑に囲まれて、かなりの上り下りもあった。馬車の車輪が落ちそうな道幅の箇所もあったが、他の道はさらに細い山道で馬車は通れないらしい。

「大袈裟なもんだな。たかが山賊一人護送するのに鉄の馬車とはな。縛り上げて馬に括りつければいいだろうに」

赤い胴鎧をつけた雇われ者の一人が道の下の急峻な山肌を見下ろして言った。凹みのある兜を被った別の一人が言葉を返す。

「仲間が取り戻しに来るのが怖いんだろう」

「それにしても、野盗山賊の類いだろう。こうやって俺たちがついてるんだ。そう易々とは奪い返せないだろうに」

小柄な丸い鼻をした男——確かヴォルハンとかいう名前——が言った。「お前たち、馬車の鉄板を見なかったのか。いや、そもそも白鷺党のことを何も知らんと見えるな」

赤胴の男が幾らかむっとした様子で答えた。

「俺はシャモークからの流れ者だからな、このあたりの揉め事は知らんよ」

「俺はゲティスデイルの合戦の生き残りよ。白鷺党なんて名乗っていたって、野武士か山賊がいきがってるだけだろう」

兜の凹んだ男が小馬鹿にするように首を振った。

ヴォルハンは傷だらけの鎧に覆われた肩をすくめ、醒めた笑みを浮かべた。

「お前たち、このあたりで長生きしたいなら、もうひとつものを知らんな」

それから彼は白鷺党について語った。

「このあたり——キンズエルからラングードへかけての土地——は長らく長手のマヴァックが治めていた。だが、海狸の年のダネルの戦で東から来たゼクセナンの軍勢がマヴァックを打ち破った。瞬く間に版図を広げて今じゃゼクセナンは大公なんぞと名乗っている」

「そんなことは知っている。成り上がりのゼクセナン大公様だろう。俺たちの雇い主様だ」

兜の凹んだ男が口を出したが、ヴォルハンは話を続けた。

「性急な大公は次なる領地を求めて西へと軍を進めたが、戦に勝ったからといって領民が皆素直に従うわけじゃない。マヴァックとその一族は山の民ナーカウの血を引いているって噂だ。山の民とは交易もして、平穩に過ごしてきた。だが、大公は法外な税を取り立て、ナーカウが神聖視する森の木を切り倒して砦を築き、若者を奴隷としてこき使った。マヴァックの残党に大公の支配に不満を抱く者たちがこの山々に根付くナーカウの民と手を結んで白鷺党が生まれたってわけだ」

「そいつら、そんなに厄介なのか」

シャモークから来た男が首のあたりをかきながら言った。

「ナーカウの民なら聞いたことがある。遠い昔から山々に住み、森や山の精霊とも交わりがあるっていう話だろう。山奥で修業して霊力を身につけた者もいるっていうじゃないか」

兜の凹んだ男はそう言いながら自分の言葉をあまり信じてはいないようだった。

「霊力って、どんなことができるんだ」

赤胴の男が訊く。

「翼が生えて木から木へ飛び移るって話だ」

「それならナクシャッツの猿とかいう生き物と同じだろう」

赤胴の男はまわりの木々を見回した。

「猿に翼はあるまい。奴らは夜目が利いて夜の森でも動き回れる。下生えの中を蛇みたいに忍び寄るのも得意だ。並の兵じゃとても太刀打ちできないらしい」

ゲティスデイルの生き残りは凹んだ兜の被り具合をなおした。

「それで俺たち百戦錬磨の強者が雇われたってわけか」

シャモークの男が胴鎧を叩いてみせた。

「そりゃあ、違うな。大公は北のレゲニアとの戦に備えて少しでも自分の兵隊を温存したいんだ。こういう仕事は俺たち使い捨ての雇われ者にやらせるのさ」

ヴォルハンは肩をすくめて口を尖らせた。

「じゃあ、あの偉そうな隊長殿も捨て駒か」

凹んだ兜の男は列の前の方で馬に揺られている肩幅の広い男を目顔で指した。隊長は馬上だが、他の兵士たちは皆徒歩だった。

小柄な男の声が小さくなった。

「あいつはほら、あれだ。ストンドの合戦で敵の大将を取り逃がしたって話じゃねえか。それで大公の逆鱗に触れて、顔を斬られた。命は助かったが、こういう仕事に回されてるのさ」

「ふむ、それであのご面相か。召し抱えられて俸禄をもらうのも苦労が多いな。俺には向かん」

赤胴の男は自嘲気味に笑った。

「白鷺党は戦場に送る兵糧や武器を奪い取ったり、砦の蔵を襲ったり、馬を逃がしたりして、じわじわと大公に痛手を与えている。この前は密書を持った伝令を襲って、敵方に密書を送り付けたって話だ」

「なかなか、やるじゃねえか」

凹んだ兜の男が疎かに髭の生えた顎をこする。

「ああ、だが、奴らもしくじりはする。この鉄の馬車の中の奴は白鷺党の首魁かそれに近い奴らしい。アズコックでの戦いで捕らえられたって話だ。銀髪のゾルビアッドを知ってるか。大公のお抱え魔道士だ。奴が火炎の術で白鷺党を打ち破ったんだ。その時の捕虜らしい」

「魔道士は俺は虫が好かん。あいつら何を考えているかわからん。それ

で、何だってこんな嚴重な馬車なんだ」

赤胴の男が言うと、凹み兜の男が当たり前だと言わんばかりに答えた。

「そりゃあ、靈力を使うからだろ」

「わからんな。壁抜けの魔術でも使えるのか」

私は彼らの会話に口を挟んでみた。

「封印の呪文が書きつけられている。その馬車の鉄板が結界になっているんだらう。中の者が我々を操って殺し合いとかさせないためか、あるいは遠感の術でお仲間を呼び寄せないようにするためか」

ヴォルハンが私の方を見てにやにやと笑った。

「ほほう、ものを知ってるじゃねえか。ランケンとかいったな。親戚に呪医でもいるのか。そうさ、銀髪のゾルビアッドが魔術で靈力を封印したに違えねえ」

「そういう血筋はないがね。その手の輩にはなぜか好かれる質なのさ」

赤胴の男が魔除けのつもりなのか、顔の前で何かの印を結んだ。

「おいおい、縁起でもねえな。もうこの峠を越えれば、ラングードまで一日だろう。白鷺党だか何だか知らねえが、大公様にお届けして、ぱあつとやろうつてのに。ラングードには大公の軍勢についてきた女たちもいるらしいぜ。おこばれに預かりたいもんだ」

残念ながら彼の望みは叶えられなかった。何かが彼の首筋を斬り裂いて、鮮血を噴き出させたからだ。魔除けの印は刃には役に立たなかった。

「敵襲、敵襲だ」

一瞬の間を置いて誰かが叫んだが、そのわずかな間にもう一人が血を噴いて倒れた。唸るように空気を裂く音がして、私はその場に転がって死から逃れた。小振りの短剣らしきものが弧を描いて飛んでいくのが見えた。また空気を裂く音がした。すぐ近くにいた兵士の胴鎧に矢が突き立ち、彼は立ち木に礫になって死んだ。

「馬車を守れ、囚人を奪われたら褒美は出んぞ」

アプスタル隊長が叫んだが粗方の兵士は飛んでくる短剣や矢をかわすのに精一杯だった。私は朽ち葉に覆われた地べたを這いずって、馬車の方に近づいた。一イート（約三十センチ）も離れていない地面に矢が突き刺さる。

木立の間から光るものが飛んでくるのが見えた。投剣だ。凹んだ兜の

男が首をすくめてかろうじて刃をかわした。彼は馬車の影に転がり込もうとした。だが、凹んだ兜をかすめた刃は空中で弧を描き、彼の喉笛に突き刺さった。ゲティスデイルの戦の生き残りはここでは生き長らえることはできなかった。

投げた者の手元に戻ってくる奇妙な武器を南方で見たことはあったが、それとは違うものに見えた。紐がついているわけでもない。投じられた短剣は見えない力でその動きを操られているかのようなだった。

馬車のまわりには隊長と数名の兵士が陣取っていた。私は車輪の影に転がり込んだ。

「馬鹿者、立って戦え」

隊長は怒鳴ったが、次の瞬間、短剣がその頬をかすめた。アプスタルは血の滴る頬を押さえて、私の隣に屈みこんだ。

「勇ましきだけじゃ太刀打ちできないこともあるさ」

私の言葉に隊長は黒い髪に縁取られた顔をしかめた。額から眉間を通り頬にまで達する刀傷が歪む。

「くそ、これでは大公様に顔向けができません。これ以上しくじりを重ねたら……」

「逃げて他所に行けばいいのさ。命あつての物種って言うだろう」

梢が揺れるざあという音がした。頭上から焦茶や深緑の腰布をまとった者たちが襲いかかってくる。体や頭に葉のついた木の枝を付けている者もいた。奇妙な斑模様の入墨かあるいは絵の具で描かれたものが顔や体を覆っている。数は十、二十、いやもっといるようだ。これが白鷺党、いやナーカウの民なのか。

襲撃者たちは反りのある山刀や斧を手には護送隊の男たちを斬り倒した。刃から逃れると、どこからか短剣が唸りをあげて飛んできて喉笛を斬り裂き、矢が体を刺し貫く。

たちまち、あたりには骸がごろごろと転がることとなった。残っているのは馬車の陰に隠れたほんの数名のようだった。ヴォルハンはずでに骸となったのか、姿が見えなかった。

隊長と私は顔を見合わせた。今ならかろうじて、崖下に逃れることもできるかもしれない。私たちは息を合わせたように、馬車の陰から這い出して、山道の下の斜面に向かった。弓矢の唸る音、投剣が飛んでくる空気を

裂く音がした。

私たちは道の端から急な斜面に身を投じた。木々と下生え、突き出した岩が体のあちこちを打ち続けた。上の方から襲撃者たちの声が聞こえたが、すぐにそれはどこから聞こえているのかわからなくなった。緑と茶色と黄色が目の前でぐるぐる回り、何もわからなくなった。

二

目が覚めるとあたりは薄暗かった。永遠に薄暮に包まれているという冥界の入り口かと思ったが、体のあちこちが痛み、ねぐらに帰るのか、鳥の鳴き声も聞こえた。どうやらまだ生きているらしい。

ゆっくり体を起こしたが、足下の土が崩れて、斜面を転げ落ちそうになった。私の体は急斜面に残った木の根に引っかかって止まったらしい。下からは水音が聞こえてくる。大小の岩らしきものも見えた。

打ち身や擦り傷は無数にあるようだが、骨は折れていない。どこぞの幸運の神のおかげかもしれないが、感謝の祈りを捧げる習慣はなかった。

上を見上げてみたが、立ち並ぶ木々の梢の向こうに道は見えなかった。下の川まで降りた方が無難なようだ。

何度か滑りそうになりながら河原まで降りて、冷たい水を飲んだ。少しだけ頭がはつきりした。上流の山間の空が茜色に染まっている。東の空には既に幾つか星が見えた。

石だらけの河原には死体が幾つか転がっていた。岩に頭を砕かれたものもあった。血のついた大岩の影で動くものがあった。咄嗟に腰に手をやったが、剣はなかった。転げ落ちる最中になくしたらしい。

手近な死体から剣を取ろうとしたが、その前に岩陰から現れた男が口を開いた。

「お前か。運のいい奴だな」

「僕の忠告のおかげだろう。感謝してほしいね」

アプスタル隊長は私の言葉を無視して、痛みを確かめるように肩を回したが、その拍子に右の肩当てが外れて落ちた。千切れた紐を振って隊長は言った。

「これじゃ大公様に目通りも叶わん」

「まだ、そんなこと言ってるのかい。命あつての物種だと言っただろう」

隊長は肩当てを拾い上げると、千切れた紐を結びなおそうとした。

「俺は出世したいんだよ。この戦続きの世で名をあげて、いつかは〈東の玉座〉に座って見せる。そのためには、まずは大公様の覚えめでたき男にならんとな」

アプスタルはうまく紐が結べずに苛立ち、肩当てを投げ捨てた。それから近くの骸から千切れていない紐のついた肩当てを外して、自分のものにした。

「汚名挽回かい」

「何だと」

隊長は私をにらみつけた。傷痕のせいで面持ちがひどく引きつり歪んで見えた。

「好きにするがいいさ。〈東の玉座〉とやらの座り心地がいいことを祈ってるよ」

私は別の死体から剣を頂戴した。

私は川沿いに西に向かおうとした。川筋を辿っていけばラングードはそう遠くはないだろう。そこでもう少しまともな仕事を探して路銀を稼ぐつもりだった。だが、隊長は私とは考えが違ふようだった。

「おい、どこへ行くつもりだ。お前も手付けの金はもらっているんだろう。仕事は最後までやるものだ」

私は死人の剣を腰帯に下げたが、帯に括り付けていた革袋がなくなっていることに気づいた。斜面を転がる間にどこかに落としてしまったのだろう。

「あんたの出世の片棒を担げというのか、命懸けで」

「そんなことは言っておらん。俺たちの仕事は囚人をラングードまで送り届けることだ。まだ、仕事は終わっちゃいないという話だ」

「正気か。見ただろう、白鷺党だかナーカウの民だか知らないが、奴らは尋常な相手じゃない。何だ、あの投剣は。手練れの使い手には幾度も出会ったが、あれは修練したからできるものじゃない。魔法か妖術か、その類いだ。そういう相手に二人で何をするとやうんだ」

「三人なら何とかなりそうかい」

夕闇の中から声がした。どこから現れたのか、小柄な男が私たちのすぐ側に立っていた。

「ヴォルハン、生きていたのか」

「俺はへまはしねえのさ。あんたらより一足お先にとんずらさせてもらったよ」

隊長がにらみつけ、剣に手をかけた。

「おっと、仲間割れをしているゆとりはねえだろう。俺は自分の命が一番大事だがね、二番目には金が大事だ。この人数で馬車の中の奴を取り返してラングードへ送り届ければ、大公様からは死んだ奴らの分も褒美がたっぷり出るだろう。隊長さんは立身出世の道が開ける。ランケン、あんたは西の都へ行くつもりだって言ってたな。路銀は幾らあったって足りやしないぜ」

ヴォルハンは丸い鼻先をこすって、にやにやと笑った。

「路銀は必要だがね。僕もあんたと同じで命が惜しいのさ。二人でも三人でも変わりはしない。森の中を彷徨い歩いてナーカウの民の餌食になるのは御免こうむるね」

ヴォルハン「そりゃあ、そうだがね」と言いながら、懷から何かを引っ張り出した。筒状に丸められた薄い皮のようだった。

「俺はこういうものを持ってるんだ。白鷺党の根城の地図だ」

「何だと、貴様、そんなものを持っていながら……」

隊長が怒気を含んだ声を出す。

「どうして黙ってたんだってか。俺は別に大公様に忠義を誓ってるわけじゃねえからな。この仕事もただの金儲けだ。こういうお宝は自分のために一番いい時に使うもんだ」

「それをどこから手に入れた。貴様、どこぞの間者ではあるまいな」

アプスタルは剣を抜いて切っ先をヴォルハンに突きつけた。

「間者だと、俺がそんな間抜けに見えるか。こそこそ虫みたいに叢を這い回って、使い捨てにされるのは真っ平さ」

隊長はヴォルハンを信用したわけではないようだったが、闇雲に森の中を探しまわるわけにはいかないと考えたのか、それ以上追求はしなかった。ヴォルハンの地図には川と山が大雑把に描かれ、街か村、それに奇妙な渦巻き状の標が幾つか描かれていた。渦巻きの標同士は線で結ばれ、何か

の図形を成しているようにも見えたが意味はわからない。

「随分と古いもののようなだ。少なくとも大公がこの地に来るよりはだいぶ以前のもののようだが」

「それでは奴らの根城など書いてあるはずがないではないか」

アプスタルが苛立った声を出した。

「まあ、落ち着け。いいか、この渦巻きが多分アズコック砦だ。あそこにはナーカウの連中の先祖の墓だか聖地だかがあったんだ。そこを大公が壊して砦を作ったんで、奴らは怒って逆襲に出た。だがゾルビアッドに撃退されて俺たちがお守りしてた奴が捕まった。そして、川の曲がり具合からすれば、こっちがラングードの街だろう。これを見ろ。渦巻き模様が近くの北の山の中にある。多分これもナーカウの古い墓か何かだ。奴らの住み処は大抵そういう場所にあるんだ。いや、逆かもしれないねえが。とにかく、そこを根城にして馬車を襲ったに違えねえ」

ヴォルハンが示す場所以外に近くに渦巻きの標はなかった。ラングードの街の側にもそれらしきものが小さく書かれていたが、大公のいる街の側を根城にはしないだろう。

ヴォルハンがナーカウの根城だという場所は川をしばらく遡ったあたりから左岸の山道を登って行くらしかった。川の北側にあたる左岸の方が、山の傾斜は緩やかで登れそうな気配はあった。

「ふむ、何も確証はない。だが何もないよりは増しということか。ランケン、お前も同道するんだろうな」

隊長が剣を鞘に納めながら私に訊いた。

「山道の入り口までは同じ道だ。とりあえず一緒にしよう」

隊長は不機嫌に唸り、ヴォルハンにはにやにやと薄笑いを浮かべた。

私たちは浅瀬を見つけて川を渡り、森の入り口で夜を明かした。寒かったが、火を焚けばナーカウの民に見つからないとも限らない。夜の河辺には生き物の気配がした。森の獣が水を飲みに来ているのだろうか。どこかで狼の遠吠えが聞こえたが、幸いにも近づいてくる様子はなかった。

夜が明けると私たちは大小の岩が転がる川縁を上流に向かって進んだ。対岸はずっと急斜面が続いており、ところどころ岩肌がむき出しの崖になっていた。道は少しずつ登っている。

昼ごろ、山から小さな流れが川に注ぎ込んでいるところに出た。ヴォルハンの地図によれば、どうやらここがナーカウの民の根城への入り口らしかった。はっきりとした道があるわけではなかったが、小川に沿ってかろうじて人が歩けるように見える。

「さて、どうするね、ランケンさんよ。ここで一発大勝負に賭けてみる気はねえかい」

「雇われ者なら仕事をきちんと果たせ。それがお前の務めだ」

一文無しでラングードへ向かうことへいささかの逡巡はあったが、私は答えた。

「賭事は好きじゃない。手付け分の仕事は充分果たした。幸運を祈るよ」

「ふん、つまらねえ奴だな。ま、好きにしろ」

「意気地のない男め。矜持というものはないのか」

「ないわけじゃないがね、ここでどうこうするものでもない」

ヴォルハンはふふんと鼻で笑ったが、私のことなのかアプスタルのことなのか、わからなかった。隊長は不機嫌そうに背中を向けた。

私は小川を石伝いに飛び越え、川沿いを上流に向かった。さして行かぬうちに背後から物音が聞こえた。剣戟の響きのように聞こえた。そのまま歩き続けるのが正しい道程だったのかもしれないが、私は踵を返した。「やれやれ」と誰かがつぶやいた気がしたが、多分私の声だろう。

先刻分かれた河辺で隊長とヴォルハンが数人の男たちに取り囲まれていた。茶色や緑の腰布をまとい、手斧や山刀を手になっているのはナーカウの民に違いなかった。ヴォルハンの地図はきつと正しかったのだろう。

敵は四人、隊長とヴォルハン、小川の注ぎ口の大岩を背にして防戦していた。あたりに矢が散らばっていた。森の中からの襲撃はうまくかわしたらしい。

小川を渡る前に襲撃者は私に気付いた。やや離れたところにいた一人が矢をつがえようとしたが、私は射られる前に懐から短剣を投げつけた。投剣は左肩に突き刺さり、奴は弓を取り落とした。

他の三人が私の方へ目を向けた隙に隊長とヴォルハンが打って出た。

隊長の長剣が一人に手傷を負わせ、ヴォルハンは両手に握った短剣で弧を描いて動き、もう一人をのけ反らせた。

私は小川を越えて、弓を拾い上げようとしている男の頭を蹴り上げた。鼻血をふいてひっくり返る男に刃を叩き込もうとした時に、空気を裂く音がした。咄嗟に頭を下げると唸りをあげて短剣がかすめた。短剣は私の頭越しに川面の方へ飛んでいったが、水面の上で陽を浴びてざらりと光ると、大きな円を描いて、こちらへ向かって飛んできた。

ありえない軌跡で飛ぶ剣をすんでのところかわしながら、自分の剣を叩きつけた。ほとんど偶然だが、私の刃は投剣に当たり、それは上へと弾かれた。そのままなら、森の中に飛び込むところだが、そうはならなかった。投剣は川岸に枝垂れかかる葉叢を切り裂いて、また進路を変えると、もう一度弧を描き、こちらに向かってくる。

刃が揺らした葉叢の中に人影が見えた。浅葱色の服を着た細身の姿に向けて、私は短剣を投げつけた。

私の投剣は当たりはしなかったが、こちらに飛んで来る剣は大きく外れて、今度は水音を立てて川面に落ちた。

次の刹那、私は向こう脛をしたたか蹴られて、その場に倒れ込んだ。鼻血を出した男が腰帯から抜いた山刀を私の喉元に突きつけた。男の股の間から、隊長とヴォルハンが森の中から飛び出した浅葱色の服の奴に後ろから頭を蹴られて、昏倒するのが見えた。すかさず他の二人が刃を向ける。細身の敵は二人の頭を蹴った勢いで宙でくると回り、河原に下り立った。

「殺すな。こいつら、どうしてここをうろついていたのか、吐かせる」

低く厳しいがそれは女の声だった。浅葱色の上衣はわずかに胸乳を覆うばかり、幾らか色の濃い緑色の腰布から突き出た赤銅色の足が山獅子のようにしなやかに動いて、女は私の方に歩み寄った。

「いい腕前だ。この間合いで投剣を打てるとは。どこで腕を磨いた」
「アニヤチの山奥だ」

女は切れ長の黒い目を細めて私を睨んだ。

「戯けたことを言うな。そんな国は古老の昔語りに出てくるだけだ」

「本当のことさ。それより、君こそどうしたらあんな芸当ができる。曲芸師に習ったわけじゃないだろう。魔術の使い手なのか」

女は小鼻をわずかに動かして笑いのような表情を作った。

「山奥で修業したのさ」

ヴォルハンが苦笑いを浮かべて軽口をたたいた。

「やっぱりこっちの道を選んだんだな。二人じゃ寂しいと思っていတာさろだ」

「ああ、素敵な道行きになりそうさ」

「貴様ら、このままですむと思うなよ。我々がラングードに着かなければ、大公様が必ず次の部隊を送り込んでくるぞ」

隊長の台詞は負け惜しみのようにしか聞こえなかった。

「それはどうかな。ゼクセナンは北のレゲニアが気になって仕方がない。

動きがあれば邪炎の妖術師も北へ飛ぶだろう」

投剣使いの女の答えにアプスタルは気色ばんだ。

「貴様ら、レゲニアと結んでいるのか」

「さあな。お前の大公様は人徳に欠けている。敵には事欠かないだろう」

アプスタルは怒って何かわめいたが、女はとりあわなかった。

私たちは武器を取り上げられた。ヴォルハンの懐の地図も彼らの目を逃れることはできなかった。地図を見る女の目が厳しくなった。

「これをどこで手に入れた」

「さあな。どつかで盗んだもんだが、忘れちゃったな」

女は短剣をヴォルハンの丸い鼻に押しつけた。

「少し、削ってやろうか」

「おいおい、きれいな顔でおつかねえこと言わねえでくれよ。そいつは婆さんの形見なんだ。本当さ」

「嘘だとわかったら、お前の鼻を削ぐ。じきにわかることだ」

女は剣を収め、ヴォルハンは鼻先を両手で覆った。

前後をナーカウの民に挟まれて小川沿いの隘路を進んだ。道は次第に険しくなり、岩塊をよじ登るようなところもあったが、ナーカウの者たちはものともしなかった。特に投剣使いの女は猿のように身軽だった。道中、彼らはウォモレン（共通語）ではない、聞き覚えのない山の民のものらしい言葉でぽつぽつと会話を交わした。女の名前はワムリサというらしいことだけはわかった。

陽が傾く頃、私たちは高さ四十イート（約十二メートル）はある崖の下

にたどり着いた。見渡しても道らしきものはなく、階が刻まれているわけでもなかった。細い山道の反対側は同じく深い谷だった。

崖には蔦が何本も上から垂れ下がっていた。ナーカウの男が一人、その一本を確かめるように引つ張ったかと思うと、それをつかんですると崖を登り始めた。男はあつという間に崖の上へ姿を消した。

——多分ワムリサ——は口元に手を当てると、それに応えて同じ調子の声を返した。

「ここを登るのか」

隊長の声はいささか気弱に聞こえた。

「怖いのか、武人であろうに。お前の求めているものはこの上だぞ」

「誰が怖いと言った」

アプスタルは手近な蔦を手に取り、崖を登り始めた。半ばまで上ったところで女が言った。

「その右側の蔦をつかめ。お前のつかんでいる蔦では上まで持たない」

「何だと、ふざけるな」

「教えてやっただけ、ありがたいと思うことだ」

「くそ」

アプスタルは崖の途中で大きな体を揺らしながら四苦八苦して隣の蔦に手をのばし、どうにかそちらに移ることができた。

隊長が登りきると、ヴォルハンが蔦をつかんだ。

「こいつは大丈夫なんだろうな」

「お前は身が軽いから大丈夫だ。多分な」

ヴォルハンは口の中でぶつぶつ言いながらも、身軽に崖をよじ登っていった。

私は最初に男が登って行った蔦を手にした。二本の蔦が絡まっているように見えたが、上の方を見ると、どうやらそれは縊り合わせられたものようだった。

「これが正解かね」

「お前はものをよく見ているな」

「誉められてうれしいね」

「そういう奴は油断ならない」

ワムリサはわずかに笑みを作ったが、鋭い目つきは変わらなかった。

崖登りは楽しい体験ではなかった。崖には自然に穿たれたものか、削られたものか、足をかけるらしい窪みがところどころにあったが、もう少しで登りきるところで、足をかけた岩が崩れた。私は必死で鳶にしがみつ、何とか崖を登りきった。

女と他のナーカウの者たちは私の後から登ってきたが、特段苦労している様子はなかった。

崖の上は平らな岩棚のようになっており、その先の山の斜面に張り付くように二十かそこいら、大小の天幕が立っていた。三角形の天幕は布ではなく動物の皮をつなぎ合わせて作られているように見えた。赤や青、緑や黄色で様々な絵模様が描かれている。

集落の奥の方、高くなった部分にさらに丸く盛り上がったものが見えた。碗を伏せたような形のそれは明らかに人の手になるもので、墳丘のように思えた。その手前には丸太を組んで作られた小さな建物がある。何本も立てられた細長い棒の上に色とりどりの旗が翻っている。村の長の住まいか、あるいは何かを祀る場所のようにも思われた。墳丘らしきものの背後には深い森と山が続いていた。

岩棚の上には数十人の人々がいた。馬車を襲撃した者たちと同様の山刀や弓矢、斧を持った男たちもいたが、半分は女と子ども、年寄のようだった。彼らは白で木の実と思しきものを挽いたり、木の皮から糸を紡ぎ出したりしていた。手斧で木を削っている者もいた。

ナーカウの根城というから、皆のようなものを漠然と考えていたが、ここは山奥の小さな村にしか見えなかった。

私たち三人は変わらず刃を突きつけられていたが、投剣使いの女も含めて、彼らの面持ちは随分と和らいでいるように感じられた。

「ふうむ、あんたの地図は間違っていないのか。ただの山の民の村にしか見えないが」

「ふむ、白鷺党の根城がここだけということねえだろう。マヴァックの残党どもはもっと山裾の方にいるんだらうよ」

ヴォルハンは私の問いに肩をすくめた。

寄ってきた幼い子どもが私の上衣の裾を引っ張ってにつこりと笑った。

「駄目よ、あっちに行つてなさい」

そういう女の声にも先刻までの鋭さはなかった。

「俺たちをどうするつもりだ」

隊長は武張った声を出したが、私とヴォルハンよりも戸惑っているように見えた。

「それはこれから決める。カノートが会う」

「カノートというのは」

「お前たちが馬車で送ろうとしていた者だ」

私たちのまわりに集まっていた人々が自然に道を開いた。私たちは階段状になった村の奥の方へ進むよう促された。

四

間近で見ると墳丘は差し渡しが四十メートル（約十二メートル）、高さが十メートルほどあり、短く刈り取られた草の中に幾つもの黒っぽい石が見えた。石は人の頭ほどか半身ほどの大きさで、何かをかたどっているようにも見えたが、よくわからなかった。

手前の小屋はごく質素な作りで、建てられたばかりのように見えた。草で葺かれた切妻の屋根の上には色とりどりの旗が立てられ、入り口の左右の柱にも様々な色で半ば紋様と化した鳥や獣、魚や虫の絵が描かれていた。入り口に扉はなく、何色にも染められた布が掛けられていた。

ワムリサは掛け布をめくり、地図を持って先に小屋の中に入った。中からはわずかに歌うような声が聞こえてきた。しばらくして「入れ」という声がした。ワムリサの声ではないような気もしたがよくわからない。

薄暗い小屋の中は土間の奥が一段高くなっていて、皮の敷物の上に胡坐を組んだ人影があった。

それは奇妙な人物に見えた。身の丈は十かそこいらの子どもくらいしかなかったが、仄暗い小屋の中で見た限りでは、子どもにしては妙に老成した面持ちのように感じられた。かといって背丈の縮んだ老人でもく、赤銅色の肌は艶やかでしわはないようだ。黒い真っ直ぐな髪を肩までのばし、薄茶色の皮の貫頭衣をまといっている。額と頬には直線と円を組み合わせた人墨らしきものがあった。

切れ長の目に大きな黒い瞳、小さな鼻と口は整った形をしていたが、男なのか女なのか、それもよくわからなかった。

「これは驚いた。白鷺党の頭は年端も行かぬ子どもだったのか」

ヴォルハンは無理に浮ついた声を出しているようだった。

「俺たちはこの子どもを鉄の馬車で運んでいたのというのか。おい、謀ろうとしても無駄だ。本当の首魁は別にいるんだろう」

アプスタルの声にも何かを畏れているかのような響きがあった。奇妙な人物の眼差しはどこに向けられているのか、よくわからなかったが、それでも心中を見透かされるような奇妙な感覚を覚えた。

ワムリサは端の方にやはり胡坐を組んで座り、うつむいて臉を閉じていた。ヴォルハンの地図はカノートの前の木の盆に供物のように置かれていた。

「ヴォルハンとやら、お前はこの地図をどこで手に入れた」

カノートはほとんど口を動かさずに話した。その声は滑らかで美しくあったが、子どものものとも大人のものともつかない不可思議な響きを持っていた。

「そいつは死んだ婆さんの行李から出てきたもんだ。盗んだんじゃないぞ、本当だ」

「そなたの祖母の名は何という」

ヴォルハンは祖母の名前をよく覚えていないようだった。

「シウル、シウルなんとかだ。シウル婆さんとか呼ばれてた。うろ覚えだな。それがどうしたって言うんだ」

「シウルズレットだ。お前はクロイエの砦が落ちる時、落ち延びたシウルズレット姫の裔だ。シウルズレットの父、ヘイガーブル王の妃はナーカウの女だ。ナーカウに助けを求めるべくその地図を持たせたが事はうまく運ばなかったのだろう」

ヴォルハンは声を荒げた。

「馬鹿なことを言う」と餓鬼でも容赦しねえぞ。俺はそんなご大層な生まれじゃねえ。戦で焼かれたノスマの村から拾われたただの盗賊だ。王だの何だの大嫌いなんだよ」

カノートは落ち着いた声で話を続けた。

「ゼクセナン大公の父、毒虫のウビディがクロイエの戦いでヘイガーブル

王を殺した。大公はお前の一族の仇だ。この地図に宿ったシウルズレット姫の御霊がお前をこの地に導いたのだ。お前はヘイガーブル王の裔、ナーカウの血を引く者だ。ともに戦い、祖先の霊に報いるが良い」

隊長と私はヴォルハンの顔を見たが、一番驚いているのは彼自身のようにだった。

「何を言ってるんだ、この餓鬼め。そんな話、知らねえって言ってるだろう」

カノートはヴォルハンの言葉など聞いていない風で、黒い双眸を隊長の方に向けた。

「アプスタルとやら、お前は野心家だ。大公に取り入って力を得ようとしている。だが、大公は敗れる。祖霊が眠るアズコックの塚を破壊し、聖なる森の木々を切り倒し、戦のための砦を作ることに使った。ラングードの街に火をかけ、そこでも森の木々を切り、人々を奴隷にして砦を作らせている。もはや命運は尽きている」

カノートは淡々と話を続けたが、隊長は肩を怒らせて大声を出した。

「大公様が敗れるだと。戯けたことを言うな。お前たち山の者やマヴァツクの残党が幾ら足掻いたところで、所詮は蠅螂の斧、大公様の軍勢に太刀打ちできるわけがなからう」

「お前はラングードまで私を護送するという任を果たせなかった。ゼクセナンはラングードで私を磔台の上で晒し者にするつもりだった。人々の抗う心をへし折るためにだ。お前はすでに敵將を取り逃がすしくじりをしかした身、戻ったところでひどい責めを負わされる。今度こそ首を刎ねられるかもしれない。そして、ゼクセナンは我らに敗れる。今が最後の機会だ。我らとともに戦うのならお前の首もつながつたままでいられるかもしれない」

隊長は顔を紅潮させて唸り声をあげた。

「ふざけるな。俺はお前を捕らえて、いいや、お前のその首を掻き切って、必ずや大公様にお届けする。命運が尽きているのはお前たちだ」

アプスタルはカノートの方へ飛び出そうとした。ワムリサはうつむいたまま動かなかったが、何かが彼を押し止めた。一二歩進んだところで動きが止まり、その場に膝をついて苦しそうに肩で息をした。

「その顔の傷を忘れることはなからう。お前はいずれはゼクセナンを殺そ

うと考えている。我らとともに戦い、屈辱を晴らすが良い」

隊長は膝をついたまま、頭を抱えてうめいた。

カノートは表情を変えずに私の方を見た。漆黒の瞳に吸い込まれそうな異様な感覚が私を襲った。視線を合わすまいとしたが、目をそらしたその先にまた黒い瞳が待ち構えているように感じられた。

「お前は様々なものを見てきた。そう、世界の様々な場所で様々なものをここでまた一つ見るが良い」

「物見遊山も飽きたんでね。元いた西の彼方の街に帰る途中なんだ。できればうんざりするようなものはもう見たくないんだが」

「帰り道は遠い。まだ、様々なものを見るだろう」

「僕はともに戦わなくていいのかい」

カノートは初めて表情らしきものを見せた。小さな口元がわずかに笑みを作ったように見えた。

「お前は自ずから剣を取る。彼らのために戻ってきたように」

私は肩をすくめて見せたが、カノートは何も言わなかった。しばしの間を置いて、隅の方でずつと押し黙っていたワムリサが仕草で小屋を出るように示した。

私たちは岩棚の端の方にある岩壁にできた窖に連れて行かれた。柵や扉があるわけではなく、見張りがつくわけでもなかった。

「どういうつもりなんだ。勝手に逃げておかまわんということか」

ヴォルハンはかえって不安そうに窖の奥を探ったが、十イートほどの奥行きがあるだけだった。

「逃げると言っても、あの崖を下りるしかないのだろう。岩棚にはいつも人がいる。無理な話だ」

「いやいや、別の道があるはずだ。地図にも描いてあったんだ。あの土饅頭の後ろあたりじゃねえか」

ヴォルハンはそう言って墳丘の後ろの黒々とした木立を見遣った。

「あのおかしな餓鬼をかつさらって、そのまま山に逃げ込めば何とかなる」「無理だ。村の者たちの目に付かずに近づくことはできないだろう。それにカノートの力を見ただろう」

私は窖の中に寝ころんでいる隊長を指し示した。アプスタルは小屋の中でうずくまっただけで一言もしゃべらず、眉間にしわを寄せては時折首を

横に振っていた。悪夢でも振り払おうとしているかのように。

「ところで、お前は本当にヘイガーブル王とやらの血を引く者なのか」

ヴォルハンは岩室の床に唾を吐いた。

「馬鹿言うんじゃないよ。俺は七つの時から盗人家業で食ってきたんだ。

どこぞの偉い奴の末裔だなんて冗談にもならねえ。だいたい、そういう王だの何だのっていう奴らが一番信用ならねえ。俺たちや、殺つても一人二人だが、奴らは百人でも千人でも平気で殺してるだろう」

「ふむ、それはその通りだが、あの地図は婆さんが持っていたのは本当なんだろう。何か云われを聞いていないのか」

「知るかよ。戦で村が焼かれた時、焼け残りの中から拾ったもんだ。婆さんは黒焦げになって死んだ」

しばらくすると子どもが一人、窖にやって来て、身振り手振りで食事だと告げた。

「俺たちをなめてるのか」

「なかなか待遇がいいじゃないか。ありがたく思うことだな」

岩棚の真ん中で火が焚かれ、香ばしい匂いがただよっていた。木の実をすり潰して作つたらしい麺麭のようなもの、炙つた兎か何かの肉、野草の入った汁が出された。火を囲んだ村人たちも同じものを食べているようだ。

「食べろ、毒などは入っていない」

投剣使いの女が頑丈そうな白い歯で肉を食い千切りながら、言った。

「僕たちは歓迎されているのかい」

「ナーカウは客人を歓迎する。悪人なら崖の下だ」

ワムリサは美しいが凄みのある笑みを浮かべた。

陽が崖の向こう側の山々に沈もうとしていた。赤く染まった空を見上げて、誰かが歌い始めた。木をくりぬいて作った太鼓と弓弦を弾く楽の音が歌声と絡み、素朴だが美しい調べを奏でた。

火の前でワムリサが踊った。得意なのは投剣だけではないようだった。軽やかに飛び跳ね、くるくると回ると、編んで垂らした黒髪がまるで生き物のように動く。残照と炎を受けた顔が茜色に輝き、赤銅の女神のように美しく見えた。

誰かが焚き火に近づき、粉のようなものをその中に撒いた。ぱちぱちと

青や緑の火花が散り、あたりに奇妙な匂いが広がった。甘酸っぱいが葉草の類いのような感じもある、不思議な香りだった。

「今宵、三人の客人がここにいます。三人の客人は我らの仲間となる。我らは邪悪なるゼクセナンを打ち倒す。聖なる木が大いなる森に還る」

それはカノートの声だった。だが、姿は見えない。人々の輪の中にいるのだろうか。

「おいおい、俺たちはもう白鷺党の仲間ってことになってるのかい」

ヴォルハンがぼやくように言う。

「悪人は崖の下だ。選択肢はないんだろ」

突然、それまで押し黙っていたアプスタルが叫んだ。

「邪悪な大公ゼクセナンを打ち倒すぞ。森と山に平穩を。聖なる木を大いなる森へ」

隊長は星が瞬き始めた空を見上げ、幾度も大声で叫んだ。

「森と山に平穩を。聖なる木を大いなる森へ」

彼の後に続いて人々が唱和する。

「野郎、いかれちまったのか。むう、何だこれは。目が回るぞ」

ヴォルハンは何かを振り払うように頭を振って目をこすった。彼がどうしてそんなことをしているのか、すぐに私にもわかった。

幻影——なのだろうか——が目の前に広がっていた。黄色い旗印を掲げた軍勢が山間の村を襲っていた。ゼクセナン大公の軍勢だ。男を殺し、女を犯し、子どもを殺していた。川が血に染まる。青い戦旗を立てた軍勢が大公の軍に戦いを挑んでいたが、多勢に無勢で程なく総崩れとなる。領主の城館らしきものに火が放たれ燃え上がる。焼け跡で領主とその家族らしき者たちが女も子どもも首を刎ねられる。噴き出した血がまだくすぶる焼け跡に落ちて異様な臭いを放つ。

城館の奥に広がる森でゼクセナンの兵士たちが木を切り出す。押し止めようとした老人の頭が斧で叩き割られる。露になった森の奥には小山がある。なだらかな半球形のそれは村の奥の墳丘らしきものと同様のものだが、一回り大きいようだ。

兵士たちが墳丘を鍬や円匙で崩していく。白い長衣をまとい銀色の髪をのびた男が指揮を取っている。手には大きな紅玉のついた鉄色の杖を握っている。ナーカウの民だろうか、半裸の男が必死の形相で何かを訴

える。すると杖の紅玉から一筋の炎が噴き出し、男は炎に包まれてのたうち回る。

生き残った村人たちが鞭で打たれて、森から切り出した木で城館の焼け跡に新たな砦を築く。奴隷とされた人々は砦が完成すると、殺されて堀の中に投げこまれる。堀の水が赤く濁る。

鎧の上に黄色い豪華な外衣を羽織った男が砦の城柵の上から、その様子を満足気に見下ろしている。下膨れの顔にぎよろりとした目、黒い髭に囲まれた大きな口が残忍そうな笑みを作る。男は唾を飛ばして何か叫ぶ。兵士たちが槍と剣を突き上げ、その声に応える。

「邪悪な大公ゼクセナンを打ち倒せ。森と山に平穩を。聖なる木を大いなる森へ」

再び隊長の声が聞こえた。幻は消え、炎のまわりで人々が声をあげていた。子どもたちも一緒に声をあげている。

「お前も見たか」

ヴォルハンがかすれた声を出した。

「ああ」

「あの餓鬼の言うことは本当だったんだ」

私は改めてヴォルハンの顔を見た。揺れる焚き火に照らされた顔には汗が滲んでいるようだった。

「俺の婆様はヘイガールブルの娘シュルズレット姫だ。俺はヘイガール王の裔、山の民の裔だったんだ」

ヴォルハンはどこを見ているのか、目が据わっておかしな顔つきをしていた。

「大公を倒すぞ。そして王家を再興させる」

「ただの盗賊で、金は何より大事じゃなかったのか」

「もう違う。邪悪な大公ゼクセナンを打ち倒せ。森と山に平穩を。聖なる木を大いなる森へ」

ヴォルハンが隊長や村人たちと声を揃えた。私は焚き火の側にいるのに、嫌な寒気を感じて肩をすくめた。

いつの間にかワムリサが隣に座っていた。

「お前は何を見たんだ」

「大公の非道な行い、かな」

「お前は何をしていた」

「僕はそこにいなかった。ただ、兵士たちが村を焼き、人々を奴隷にし、塚を暴き、森の木で砦を築くのが見えただけだ」

「お前はいなかったのか」

「私はいなかったと答えた。」

「そうか、ならばお前は本当に西の彼方の街へ行きたいだけなのだな。好きな時にここを出ていくがいい」

「あの二人はどうなるんだ」

「彼奴らはこの戦にかかわりがある者だ」

「幻術でそう思えるよう仕組んだんだろう。あのカノートとかいう者の仕業か」

「ただ、見えるものを見ただけだ。お前は何も見なかった。我らの戦いにはかわりがない」

「わかるようなわからないような話だな。まあいい。ならば、好きにさせてもらおう」

ワムリサはかすかな笑みを残して、立ち去った。宴は存外早くに終わった。私たちは元の窖に戻されたが、中には敷物と掛け布が置かれていた。

ヴォルハンとアプスタルは横になるとすぐに眠りに落ちた。焚き火の中に撒かれた粉の力を強く受けていたのかもしれない。

私も横になったが、眠りの神はなかなか訪れなかった。岩穴を出ると村は寝静まっていた。漆黒の夜空には幾千幾万の星々がきらめいていた。

梟の鳴く声が聞こえた。どこにいるのか、姿は見えない。岩棚の焚き火はまだ幾らか炎をあげていて、その前にほっそりとした人影があった。ワムリサだろうか。私は窖から岩棚の方へ降りていった。誰も咎める者はいなかった。梟がまた鳴いた。

「何をしているんだ」

私の声に女は驚く様子もなかった。

「星を見て、森の声を聞いていた」

彼女はそう答えた。

「梟の声か」

「梟も他の数多の生き物も、木も草も」

「僕には梟の声しか聞こえないが。今夜は風もない」

「風はなくとも、木々や草の葉の声は聞こえる。お前は街の人間だな」

「サンジェリイという西方の大きな街で生まれ育った」

「その街の名前は聞いたことがある。無数の人間が集まる渾沌の街だと」

「ふむ、まあ、そんなところだ」

「なぜ、そんな所へ帰りたい」

「街の人間だからかな」

ワムリサはしばしの間を置いて口を開いた。

「本当にアニヤチに行ったことがあるのか」

「ある。サンジェリイから西の大洋を渡って、たどり着いた。そこからイーテンやイオロープを経て大海を渡り、今、ここにいる」

「イオロープか。東で戦を続けている愚かな者どもはその地からやってきた蛮族の末裔だという言い伝えがある。ゼクセナンもそうだ」

「蛮族か、そうだな。いや、どこの地に住む者でも、つまり街でも山でも、イオロープでもアニヤチでもサンジェリイでも、人間は多かれ少なかれ野蛮だ」

「ナーカウは蛮族ではない」

「ああ、そうだろう。自分たちが蛮族だと名乗る民に出会ったことはない」

「お前は世界を経巡り、何を見てきた」

ワムリサは黒い瞳で私を見つめた。焚き火の残り火が赤く映ったその目には、わずかな憐憫があるようだった。

「いろいろなものさ」

「手を出せ」

ナーカウの女は私に両手を前に出すように促し、私の指に自分の指を絡めた。

「私の目を見ろ」

彼女はそう言ったが、瞼を閉じた。その閉じた瞼から何かが広がった。いや、絡まった指先からだろうか。暖かい波のようなものが私を包み込み、

ワムリサの閉じた瞼の上で夜空の星々がきらめき、渦を巻いて一気に広がった。

長い旅路の出来事の一つひとつ思い出したわけではなかった。ただ、旅の途上で沸き起こった様々な感情が奔流のように噴き出すのを感じた。驚きや喜び、怒りと憎しみ、悲しみ、そうしたものが迸り、私の中でぐる

ぐると渦を巻いた。

「お前は様々なものを見た。お前は様々なものを見過ぎた」

ワムリサの声なのか、誰の声なのか、よくわからなかった。

「お前は悪い煙を吸い過ぎた。毒を吸い過ぎた」

声は続けた。

「世界を入れるには、人の心は狭過ぎる」

ワムリサは絡めた指に力を込めて、私を押し倒した。組み敷かれた私の腰の上に彼女は股間を押しつけ、一物が彼女の中に吸い込まれる。沸き起こった感情の奔流もまた吸い込まれていくようだ。火のように熱い肉の褻が私を押し包み、生々しい快感が四肢の先にまで広がる。彼女が身を倒し、柔らかい唇が私の唇に重ねられる。濡れた長い舌が口の中から喉の奥まで差し込まれたかのように感じる。舌先が体の中をまさぐり、感情の渦とともに一物から飛び出して彼女の胎内に戻っていくようだ。

ワムリサは再び身を起し、私の上で激しく悦楽の舞いを舞う。荒い吐息が獣の声のように夜空に響く。声は次第に甲高くなり、鳥の声のように聞こえる。赤銅色の肌がうねり、浮かんた玉の汗が星のように光る。私の腰をつかんだ両手が大鳥の鉤爪のように肌に食い込む。

長い黒髪を振り乱し、彼女は両腕を広げる。しなやかな腕に髪が絡みつき、まるで鳥が翼を広げたように見える。金色の光の粒が彼女と私の股間から広がり、翼の先まで届く。大鳥は羽ばたき、舞い上がる。私は鉤爪に捕らえられたまま、ともに夜空に浮かび上がる。星々が強く明滅し、光の大渦となり、私を飲み込んだ。何かが爆ぜる音がした。私の身体は四散し、星屑のように光って飛び散った。

体の中が空になったような感覚だった。耳元で何か柔らかいささやきが聞こえたが、何を言っているのかはわからなかった。

五

翌朝、目が覚めると私は窖の中にいた。ヴォルハンとアプスタルの姿はなかった。岩棚に降りていくと、ワムリサが炉にかけられた大鍋をかき回していた。

「二人はどこに行った」

「自分の役割を果たしに行った」

「大公との戦に備えてということか」

「そうだ」

「他の白鷺党の根城へ向かったのか」

ワムリサは鍋から碗に玉蜀黍の粥をすくって入れ、私に手渡した。

「お前の戦ではないだろう」

「それはそうだ」

彼女は何事もなかったかのように淡々としていた。昨夜の出来事は本当にあったことなのか、よくわからなくなった。私もまた怪しげな粉と幻術の虜になっていたのだろうか。

私は朝食を終えるとナーカウの村を出た。彼らは私に剣を返してくれた。崖を鳶で下りることはせずにすんだ。墳丘の奥には大岩の間を抜ける道があり、人々は普段はこちらの道を使っているようだった。こちらはこちらで険しい山道だったが、半日ほどでまたあの河辺に出ることができた。どうやら、馬車が襲われたところよりもラングードの街に近い、西寄りの場所のように思われた。

川沿いを西に進むと次第に両岸の山はなだらかになり、山間の盆地にたどり着いた。ラングードがゼクセナンの手に落ちてから、まだ日は浅いようだった。河原に草地に骸が幾つも転がっていた。青い旗印のマヴァツク方の兵士のものもあれば、腰布一枚の山の民のものもあった。

街の東側には打ち破られた城柵の残骸があり、槍や剣を持った兵士の姿も見受けられた。私は誰何を受けぬよう、大回りして街の外れの木立の間を縫って進んだ。

東側の城柵は大公の攻撃に備えて作られた急拵えのもののようで、南側の山裾まで進むと途切れており、古く低い石垣が半ば崩れかけて街を取り巻いていた。

私は崩れた石垣の一角から街に入り、人気がない通りを進んだ。ラングードは市も立つこのあたりでは幾らか大きめの街だと聞いていたが、賑わいはなかった。焼け焦げた家々の残骸がそこかしこにあり、煤けた服をまとった暗い面持ちの老人が何人か道端に座り込んでいた。若い者の姿は見かけなかった。砦の普請に駆り出されているのだろうか。

街の真ん中に広場があった。広場といってもごく狭いもので彫像や噴水があるわけではないが、おそらくはここに市が立ち、近在の者で賑わっていたのだろう。そこに今は礫台が設えてあった。腰ほどの高さの段の上に白木の礫柱が立っている。柱はまだ真新しく、受刑者の姿はなかった。広場の隅の方で年老いた女がしゃがみ込んでいた。私は彼女に尋ねてみた。

「ここで誰か礫になるのかい」

老婆はしわの寄った口元をもごもごと動かすと、茶色い嘔み煙草を吐き出した。

「くそつたれの大公さ」

「ほう、そういう予定があるのかい」

老婆は私の顔を見上げて、黄色い歯をむき出しにして笑った。面立ちからしてナーカウの民のようにも見えたが、よくわからない。

「あいつはこの集いと市の街に火をつけた。森を壊して砦を作った。アズコックの聖なる地を汚した。大勢の人間を殺した。だから報いを受けさせるのさ。もうじきさ、もうじき大公はここで礫さ」

「ふむ、そうなるといいがな」

「あんたもそう思うかい」

老婆は私の顔を黒い目で見つめた。しわの寄った相貌には似合わない輝きのある瞳だった。

「ならば、その腰のものをお使い。もうじきさ、もうじき始まるんだ」

「白鷺党が逆襲するというのか」

「森が……」

女の声をさえぎるように別のしゃがれ声が聞こえた。側の路地から杖を突いた老人が現れた。

「またここにいたのか。滅多なことを言うな。お前の方が先に礫になる」

老人は老婆を立ち上がらせようとしたが、彼女は動かなかった。

「お放しよ、あたしはくそつたれの大公が礫になるまでここを動かないよ」
「お前の気持ちはわかるが、これは白鷺党の誰かのために建てられた柱だって話だ。もうじき、ここに送られてきて礫になるらしい。兵隊が見てるぞ。家に帰ろう」

「誰かって誰だい。ナーカウの民は森の精霊が守ってくださいさる。礫になる

のはくそつたれの大公だ」

老婆の声はだんだんと大きくなり、広場の向こう側にいた兵士が二人ばかり、こちらに近づいてくる。老人は何とか老婆を立たせようとしたが、逆に杖を取り落として転んでしまった。

私は二人に手を貸そうとしたが、兵士の一人が私の肩に手をかけた。

「何を騒いでいる」

「お年寄りにちよいと手を貸そうとしただけさ」

「あたしは動かないよ。屑の大公が礫になるのを見届けてやる」

「何だと、この婆」

兵士は老婆を足蹴にしようとした。私は奴のもう片方の足を思いきり蹴った。兵士は無様に転がったが、もう一人が剣を抜いて、私に突きつけた。

「お前、見かけない顔だな」

「あんたの顔も見たことがないね」

「ふざけるな。さては白鷺党の間者か」

襲いかかってきた刃をすんでにかわして、私は奴の向こう脛を蹴飛ばした。体勢を崩したところで、右腕を取って締め上げると兵士は剣を取り落とした。もう一人が立ち上がって斬りかかってきたので、私は取り押さえていた兵士をそちらに突き飛ばした。二人がぶつかりあってわめいている内に、私は剣を抜いた。剣を持った兵士の右手に斬りつける。手甲に守られて指は飛ばなかったが、奴も剣を握っていることはできなかった。

私は二人に切っ先を向けながら、広場の様子をうかがった。二人が仲間を呼べば厄介なことになる。ここで斬ってしまった方が得策というものだろうか。

一瞬の逡巡が災いを招いた。右の二の腕に焼けるような痛みが走った。矢が突き刺さっている。礫台の陰で見えなかったのか、広場の反対側から兵士たちが走ってくる。二人も剣を拾い上げた。私は剣を振り回そうとしたが、ひどい痛みでまともに動かすことはできなかった。たちまちのうちに幾振りもの刃が突きつけられた。

「こいつ、白鷺党の間者に違いねえ」

最初の兵士がわめいた。誰かが私の首筋に剣の柄を叩きつけた。ぐるぐると世界が回り、私は氣を失った。

体がひどく揺られて目が覚めた。どうやら馬の背にぞんざいに乗せられていらいしい。目の前で茶色い馬の毛とあたりの景色が交互に見える。

「もたもたするな。明日までには普請を終えよと大公様の厳しいお言いつけだ。できなければ、命はないものと思え」

粗暴な声と鞭を打ち鳴らす音が聞こえる。泥まみれで赤茶色の地面を掘り返す人々が見える。土を運び積み上げている人々も見える。堀と土塁を築いているようだ。

また鞭の響く音が聞こえ、悲鳴とともに男が倒れる。

「役立たずめ、お前はもういらん」

山獅子を模したらしい目庇に牙のついた兜姿の男が剣を抜き、倒れた男を突き刺した。流れ出た血が堀へ流れ込む。また、鞭が打ち鳴らされる。

非道に怒りが沸き起こったが、同時に忘れていた痛みが腕と首から体中に走った。馬は土塁の間を抜け、丸太を並べた城柵の前で一度止まった。兵士たちのやり取りと城門の扉が軋む音がぼんやりと聞こえたが、また意識が遠のく。

刺激の強い匂いが鼻につき、私は再び目を覚ました。薬師だろうか、小瓶を手にした萎びた顔の男が遠ざかっていく。右腕は痺れていたが、痛みはさほどでもなくなっていた。

「目が覚めたか。命拾いをしたな、ありがたく思えよ」

誰かがそう言って、私の髪をつかみ頭を引き起こした。どうやら砦の中の広間のようなところにいららしい。あちらこちらに戦の絵模様様の織物や野牛や熊の毛皮などが掛けられているが、壁は丸太作りでまだ真新しい木の匂いがした。壁際には甲冑姿の兵士たちが幾人も並んでいる。鎧兜ではなく、派手な色の織物をまとった者も幾人かいる。文官の類いなのだろうか。

広間の床は土間だったが、正面奥は木の低い壇が設えてあった。そこに敷かれた毛皮の上に黄色い袖無しの長衣を羽織った男が胡坐を組んで座っていた。山の村の幻影で見た男だ。ちらちら光る黄衣の下に鎧は銀

で縁取られ、首飾りや指輪には幾つもの宝石が輝いている。下膨れのたるんだ顎に大きな口を囲む黒髭、飛び出しそうな大きな目が、私に向けられていた。

ゼクセナン大公の両脇には肌も露な薄絹をまとった女が品を作って寄り添っている。左側の黒髪の女が小皿の上の木苺の実を一つ、大公の口に運んだ。男は果実を噛みつぶし、口の端から赤い汁を垂らした。すると女がその汁をさもうまそうになめとった。

「お前はまことに白鷺党の間者か」

「違う。ただの旅人だ」

大公は黄ばんだ歯をむき出して笑った。

「間者かと問われて、そうだと答える者はおらぬか」

両隣の女や並んだ近習たちに追従笑いが広がった。

「旅人というが、どこから来てどこへ向かうつもりだ」

「東から来て西へ向かうところだ」

「お天道様じゃあるまいに。洒落たことを言う男だ。おもしろい」

ゼクセナンはまた笑った。回りの者たちも笑う。私は気分が悪くなってきた。

「東とはどこだ、西とはどこだ。はっきり答えよ」

大公は少しだけ強い声を出した。右側の赤毛の女が銅杯を男の口に近づける。赤い葡萄酒の滴が口元から垂れると、女はそれに舌を這わせた。

「東はイオロープ、西はサンジェリイだ」

大公は眉根を寄せて大きな目を細めた。

「イオロープにサンジェリイだと。お前はここの儂を謀ろうとするか。ためにはならぬぞ」

ゼクセナンはそう言うのと、いきなり大きな手で赤毛の女の露な尻を叩いた。真っ赤な手形が白い肌に浮かび上がる。女は苦悶のうめき声を上げた。黒髪の女がわずかに身を震わせる。

「本当のことだ。イオロープから大海を越えて来た。サンジェリイへ帰る途中だ」

「帰る、とな。お前は東の大海を越えてイオロープに赴き、戻ってきたというのか」

「そうではない。サンジェリイから西の大洋を越えアニヤチへ渡った。

イーテンを経てイオロープに達し、今、ここにいる」

ゼクセナンは黒髪の女が差し出した果物を乱暴に払いのけた。転がった木苺を女は慌てて拾い上げる。大公は横目でそれを見ると、黒髪の女の尻を平手打ちした。女が短い悲鳴を上げる。

「お前は世界を一回りしたと言うのか」

「サンジェリイに戻る事ができればそういうことになる」

ゼクセナン大公は大きな口をねじ曲げて、奇妙な笑いを作った。

「おもしろい。いずれ儂は〈東の玉座〉を我がものにする。シンデックもイリヴァーツも討ち滅ぼし、儂こそが世界皇帝プラジナーオとなるのだ。お前の話が本当なら、役に立つこともあるう」

ゼクセナン大公は自分の言葉に興奮したようにたるんだ頬を紅潮させ、両腕で左右の女を強く引き寄せた。二人の女は苦しげな声を漏らしながら、大公の首筋や耳朶をなめまわした。

「イオロープには龍が棲むとはまことの話か。黄色い髪の一つ目の蛮族がいるとも聞く。いや待て、サンジェリイには王宮よりも大きな宝物蔵があるというではないか、その話から、聞かせてもらおう」

大公は女たちの肉をもみしだきながら、赤い顔でそう言った。その時、広間の後方で大きな声がした。

「大公様、北方よりの急使にございます。レゲニアがキストンの谷より急襲をかけてきました。デヌリ砦に迫っているとのことですよ」

大公は二人の女を振り払って立ち上がった。

「レゲニアの山犬め、やりおったな。ゾルビアッド、ゾルビアッドはどこだ」

文官の一人がおずおずと答える。

「北にあります山の民の古塚を調べると申しまして、今朝ほどお発ちになりました」

「墓荒らしなどしている場合か。だが、北なら都合がいい。すぐにデヌリ砦に向かえと伝えよ。山犬どもを一人残らず焼き殺すのだ」

「御意」

大公は大きな両手を振り回し、広間が震えんばかりの大声で叫んだ。

「出陣の準備をしておけ。場合によってはこの砦の兵も出さねばなるまい。キストンの谷が奴らの墓場だ」

近習たちが慌ただしく動き出した。文官がまた恐々と大公に尋ねる。

「この者はいかがでしたでしょうか」

「牢に放り込んでおけ。いずれ、じつくり話を聞く。殺してはならんぞ」

ゼクセナンは私の方を見て不揃いな歯をみせて笑った。

「女の話も聞かせてもらおう。アニヤチの女は股座が横に割れているというのは本当か」

私は肩をすくめてみせた。この男ともう一度話がしたいとは思わなかった。

牢は砦の端の方、馬小屋の隣にあった。急拵えのもので太めの枝を組んで作った檻のようなものだった。屋根はなく、雨が降ればずぶ濡れだろう。馬小屋には屋根があり、その向こうに大きな櫓が見えた。先刻の広間はその一階にあり、天守と一体になっていた。

腕の傷がまた痛み出したが、頭の方は少しすっきりとしてきた。とりあえず、すぐに殺されずにはすみそうだが、大公の気紛れで生き長らえたと思うと気分が悪かった。広場にいた老女と同様、私もあの男が磔台上がるのを見たくなかった。二人はうまく逃げられただろうか。

城柵の中では兵士たちが忙しそうに動き回っていたが数はさほどではないように見えた。ワムリサが灰めかしたように主力はレゲニアの攻撃に備えて北のどこかに配置されているのかもしれない。

出陣の準備の隙を見て逃げられるだろうか。縛られてはいなかったが、檻の扉には錠前がついていた。雑な作りではあったが、枝の結び目は固く締まっていた、そう簡単に解けそうはない。夜を待って、何とかなりそうなどころを探してみるかなさそうだった。

日が沈み、城柵のあちこちに松明が点された。兵士たちは何ヶ所かの炬を囲んで食事をとっていたが、私のところには回ってこなかった。待遇の悪い牢だ。

幾つか張られた大きな天幕が兵士たちの寝所のようなだった。兵舎のようなものはないらしい。彼らの待遇もさして良い訳ではないのかもしれない。

賭事をしている声も聞こえていたが、夜が更けると兵士たちは粗方寝静

まった。櫓門と天守ではまだ松明が燃え、数名の番兵が槍を持って立っているのが見えた。

私の檻の回りには時折松明を持った見回りの兵士がやってきたが、常時の張り番はいなかった。私は闇の中で檻の木の結び目を一つ一つ確かめた。生憎と雨が降ってきた。傷の痛みは引かず、指先が痺れてきた。空腹が目が回りそうだった。

ようやく幾らか緩そうな結び目を見つけ出したが、雨に濡れてうまく解けない。苦戦していると回り番の兵士が近づいてきた。近くに引き寄せて、短剣でも奪った方が手っ取り早いだろうか。だが、失敗すれば厄介なことになる。

松明を持った兵士の腰には大小の剣が下がっている。檻には少なくとも腕を出してのばせる間が開いている。結び目は解けそうになかった。兵士は近づいてくる。

「おい、腕が痛いんだ。焼けるようだ。頭がくらくらする」

兵士は私の声に気がつき、松明で檻と私を照らした。

「我慢しろ。死ぬような傷じゃない」

私は腕を押さえて苦しい声を出した。

「毒だ、毒が回っている。喉が焼ける。水をくれ」

「我慢しろと言ってるだろ」

「見ろ、この傷を。腐り始めてるんだ。大公様が言っていたぞ、殺してはならん」と

「面倒な奴だな」

私は檻の側に腕を寄せ、兵士は檻の側に顔を近づけた。腰の短剣はすぐ目の前にあった。

「見てくれ、この傷を」

私は右腕を押さえていた左手を伸ばして、兵士の短剣をつかんだ。引き抜き、上へ斬り上げると、切っ先が兵士の喉を裂いた。うめき声をあげて番兵は倒れ、松明が転がった。

彼は錠前の鍵は持っていないようだった。私は先刻の結び目を短剣の先で緩め、檻の棒を一本外した。隣の棒の結び目は刃で切り裂き、外した。もう一本外せば出られる。

その時、倒れていた兵士がもぞもぞと動き、裂かれた喉からまたうめき

声をあげた。思わぬ甲高い大きな声だった。櫓門近くで松明が動くのが見えた。

「誰だ。グルノサ、何かあったのか」

松明を持った別の番兵がこちらに近づいてくる。短剣は鈍らで、もう一つの結び目がなかなか切れない。

突然、檻の棒に強い力が加わった。縄が千切れて棒が外れる。松明の揺れる炎が牙をむいた灰色の狼らしき生き物を照らし出した。

「や、グルノサ、どうした。む、お前の仕業か」

近づいてきた番兵は松明を放り出し、剣を抜こうとした。すると牢の脇から飛び出した灰色の狼が兵士に飛びかかった。番兵は牙で喉を食い破られ、グルノサと折り重なるように倒れた。私は新たに死んだ兵士から長剣を頂いた。

狼はついてこいと言わんばかりに、尻尾を振って私を砦の後方へと導いた。馬小屋の後ろを回り、城柵に沿って進むと、小さな裏門があった。板張りの扉が開いており、側に一人の兵士が横たわっていた。

私は狼に導かれて砦から逃れ出た。裏門の外にも一人の番兵が倒れており、松明が洋袴を焼いていたが、もう彼は熱いとは思えないようだった。

私は闇の中、狼を見失わないように必死で後をついて走った。雨は小降りで雲間から月光が差していた。そうでなければ、土壁に迷い、堀に落ちていたかもしれない。

砦から離れると狼の歩みは次第にゆっくりになった。私はその後ろ脚の動きにぎこちなさがあることに気づいた。

やがて森の中の小道で狼は止まり、うずくまった。苦しいうめき声は半ば人間のもののよう聞こえた。灰色の毛に覆われた背中が奇妙に歪み、膨れたり萎んだりを繰り返した。手足の節が鳴るような音が幾度もした。

奇妙な動きが治まると、彼は二つの足で立ち上がった。丸い背に灰色の狼の毛皮をまとった年老いた男がそこにいた。広場で出会った老人だった。

「あんたは僕らを助けてくれたからな。礼はしなくちゃならん。ああ、だが、久しぶりでこれはこたえるな」

老人が倒れそうになったので、私は肩を貸した。奪った長剣は杖には短

すぎたので、近くの木から枝を切り落として、手渡した。

「あんまり、驚かんのだな。どこかで同類を見たことがあるのか」

老人はしゃがれ声でそう言った。

「同類かどうかは知らないが、まあ、あることはある。狼じゃなくて虎だったが」

「虎とはなんだ」

「うむ、まあ、縞模様のある山獅子のようなものだ」

「ふうむ、会ってみたいもんだな。この近くにいるのか」

「いや、だいぶ遠いな」

「そうか、残念だ」

私は老人に手を貸しながら、小雨の降る森の道を歩いた。森を抜けて、静まりかえった街を通り過ぎ、畑と崩れた石垣の間を進んでいくと、再び森が黒々と姿を現した。

「もうじき家だ。婆さんが首を長くしているだろう。今夜は泊まっていけ」

老人の足取りが心なしに速まったような気がした。

七

老人の家は山裾の鬱蒼とした森の入り口にあった。叢から虫の声が聞こえ、山からの小川でもあるのか、小さな水音も聞こえた。

このあたりは焼き打ちも免れたようで、丸太に草葺きの小さな家は古びてはいたが、破壊の跡は見られなかった。小さな窓から黄色い明りが漏れていた。

「帰ったぞ。客人も一緒だ」

扉が軋んで開き、角灯を持った老婆が現れた。

「遅かったじゃないか。大公に首輪でもつけられたかと思ったよ」

「馬鹿を言え。儂もその気になれば、大公の飼いだの一匹二匹は食い殺せるのさ」

老人は毛皮を壁に掛けると、敷物の上にどっかりと腰を下ろし、ふうつと大きく息をついた。私は二人に礼を言った。老人はクアターレカ、老婆

はウールジと名乗った。

家の中は片づいているとは言い難かった。大小の瓶や壺、吊るされた薬草らしきもの、動物の骨などが雑然と置かれており、壁には色とりどりの絵模様の描かれた動物の皮が何枚も張ってあった。

老婆は私の腕の傷にのきつい膏薬を貼り、黒ずんだ薬湯らしきものを飲むように言った。薬湯はひどく苦かった。

老婆は炉に掛けられた鍋の中の豆と何かのすじ肉を煮た汁を木の碗によそって私に差し出した。粗織の敷物のしかれた床に座って、私は空腹を満たした。

よく逃げられたものだと言おうと老婆は不敵な笑いを浮かべた。

「あんたが騒ぎを起こしてくれたおかげさ。まあ。ぼんくらの兵隊どもになぞ、捕まりやしないさ」

「お前は無茶をし過ぎだ。ワムリサが事を起こすまでは、ちつとは我慢をしろ」

老人が膝を撫でさすりながら小言を言った。

「そういう性分なのさ、仕方ないだろ。あの子はあたしより落ち着いていて、頭も切れる。心配はいらないよ」

私は二人の顔を交互にもう一度見て、訊いた。

「ワムリサというのは、投剣使いのワムリサのことか」

二人は驚いた様子だった。

「あんた、ワムリサを知っているのかい」

「ああ、世話になったというべきか、何というべきか」

「ワムリサとはどこで会ったんだい」

私は昨日までの出来事をかいつまんで二人に話した。ワムリサとの岩棚での一件は黙っていた。馬車で運ばれていた者——カノート——との会見の件になると、二人の目は明るい灯が点つたように見えた。

「そうかい、そういうことなら、そろそろだね」

二人はワムリサは自分たちの孫だと言った。大公の軍勢が長手のマヴァックを敗り、この一帯を侵略した時、ワムリサは山へ逃れて戦いに身を投じたが、老婆と老人はラングードの街に残ったのだと言う。

「年寄りには山暮らしはきついからね。でも、何もしてないわけじゃないのさ」

ウールジは謎めいた笑みを浮かべ、クアターレカはいささか眉を曇らせた。

私はワムリサの不思議な力について尋ねてみた。

「ナーカウの民には稀にそういう力を持つ子が産まれるのさ。大昔の魔術のせいだという者もいるがそうじゃない。森の精霊の力が宿るのさ。大概は育つにつれて消えてしまうが、中にはずっと力を保ち、自在に操れるようになる者もいる。あの子がそうさ。あたしも若い頃はなかなかのもんだったんだがね」

「僕もそうだ」

クアターレカがいささか不満げに言った。

「あんたはただの狼憑きだろう。あんたの婆さんが森で狼と構ったせいじゃないか」

ただの狼憑きらしき老人は小声で唸ったが、ウールジは意に介さなかった。私はカノートについても訊いてみたが、老婆の答えはなぜか曖昧だった。

「カノートはカノートさ。森の、川の、山の精霊の力が宿るのさ。鷲や狼、兎や鹿、それに人間の靈魂が宿る。ああ、人間と言っても東から来た屑どもは別だけどね」

ウールジは西へ行くのなら、目に付きにくい間道があると言った。

「明日になったら案内してやろう。今夜はここに泊まるがいい」

灯を消すと家の主たちはすぐに眠りについた。横になると疲れが押し寄せてきた。私も炉端で薄い毛布にくるまって眠った。

夢の中なのか、現の声なのか、梟の鳴き声が聞こえてきた。近くの木で鳴いているのだろうか、やけにはつきりと聞こえた。

やがて梟の声も途絶え、奇妙な夢を見た。夜の森の中なのに、朧な青と緑の光が揺らめき、木々の樹皮や葉の一枚一枚がやけにくつきりと見えた。雨は止んでいるようだった。見事にのびた鹿の角が梢の間からのぞいた。ちよろちよろと動き回っているのは栗鼠だろうか。枝から垂れ下がっている鳶にも見えるものは蛇のようだ。黒い大きな影は熊のように見える。狼が牙をむき、青い目が光っている。すぐ側で兎が長い耳を立てているが、

狼は襲う様子はない。

鳥の声、虫の声が聞こえる。川は見えないが水音が聞こえる。蛙の声も聞こえただろうか。風はないのにざわざわと葉叢が擦れあう音がする。それは大勢の人の騒めきのようにも聞こえる。

森の中の木立が途切れた小さな広場のようなどころだ。叢の中に人の頭ほどの石が幾つも置かれている。何かの像が刻まれたもののようにも見えるが、ひどく古いものなのか形がはつきりしない。文字か絵模様のようなものが彫り込まれているようにも見えるが、それも判然としない。

盛り上がった墳丘こそないが、そこは山の村で見た場所やアズコックの聖なる場所と同種のもののように思われた。

ウールジがその石の一つ一つに木の枝を置いている。枝は掌ほどの物もあれば、腕ほどの長さの物もある。近くに積まれた枝の山からクアターレカが慎重に枝を選び出し、老婆はそれを置いてまわる。老人は狼の毛皮を被っているが人の姿だ。ウールジはすべての石に枝を置くと、今度は広場の中央に枝を積み上げていく。互いに斜めに立てかけるようにして腰ほどの高さの円錐状に枝が積み上がる。

老人がウールジに半イート（約十五センチ）ほどの棒状のものを手渡す。老女はそれを積み上げた枝の頂きに据え付ける。それは粗彫りの木の人の形のように見える。

老女は懷から革袋を取り出し、それに入った粉のようなものを各々の石と枝、中央の円錐状のものに振りかける。それが終わるとウールジは天を仰いで、何か叫んだ。

太鼓の音がする。クアターレカが石の輪の外で小振りの太鼓を抱え込み、ゆつくりと打ち鳴らす。その奇妙な律動に合わせて、ウールジはまた天に向かって何事か叫ぶ。

曖昧に漂っていた青と緑の光がゆつくりと中央の積み上がった木に集まっていく。薄暗くなった円環の周りで動物たちの目が光る。幾つも幾つもの、無数の目が光っている。葉叢の騒めきが大きくなり、それは大勢の人々の詠唱のように聞こえる。

夜空では星々が輝いている。ぎらぎらと異様なほどの強さで無数の星々が光る。それぞれが何事か呟いてでもいるかのように星の光は明滅を繰り返す。

太鼓の音と老婆の歌——それはいつの間にか叫びではなくなっていた——が一際高まると、円錐状の枝の集まりから金色と青紫の光が迸った。

木彫りの人形が一瞬蠢き、小さな人間のように見えた。迸る光は柱となり天へとびる。まるで若木が大木となる長い年月がほんのわずかな間に縮められたかのように見えた。金色と青紫の光は途中から無数に枝分かれして、一気に夜空へとびていく。それはついに星々へと届く。のびた細い枝先に葉が茂り、花が咲き、木の実が実るように、無数の星々が枝先で光り輝く。地上からのびる光の柱は幾人かでも抱えきれないほどの太い幹となり、地上には光の根が四方八方に無限にのびていく。

広場にそびえる光の巨木の周りで狼が遠吠えを響かせ、熊が唸り声をあげる。数多の生き物の様々な声が聞こえる。水が跳ねる音は魚たちのものだろうか。木立の騒めきと人々の詠唱がぐるぐると渦を巻くように響く。

光の巨木の前でウールジとクアターレカが満足気な笑みを浮かべる。二人の姿は次第に光る大木の中に吸い込まれていく。やがてその姿は幹に浮かび上がる不可思議な樹皮の模様となった。

小鳥のさえずりで目を覚ますと、家の中には夜明けの薄明かりが差し込んでいた。腕の痛みはだいぶ引いていた。炉のまわりで寝ていた二人の姿はなかった。

家の外に出ると、昨日の雨に濡れた地面に足跡らしきものがあつた。足跡は家の裏手の森の中に向かっていているようだった。私は夜明けの冷たい空気を吸いながら、森の中に入った。かろうじて踏み分け道らしきものができている。しばらく進むと柴を抱えた二人がこちらに向かって歩いてきた。

「何をしているんだ」

「見てわかんねえか。柴刈りだ」

ウールジがぶつきらぼうに答え、クアターレカがうなずいた。

「この先には何があるんだ」

「何もねえ。森が続いているだけだ。ああ、昨日言った西への道はここじゃねえ。ここ行ったら迷っちゃうぞ。戻って朝餉だ」

老婆の声は逆らい難い何かがあるように響いた。二人の背後に目をやったが、立ち並ぶ木々の向こうに何かが見えるわけではなかった。

私は踵を返して二人の家へと向かった。食事をすませると、ウールジは西へ抜ける間道への道を大きな落葉を爪で引っかけて描いてくれた。一度、街の近くに出てから落雷で折れた大木の前を南に曲がると狩人が使う古い小道があるのだという。

彼女の話の間にも、砦の方からは喇叭や太鼓の音が聞こえてきた。北へ向けての出陣が近いのだろう。

「雲行きがまた怪しくなってきたな」

クアターレカは空ではなくて街とその向こうの砦の方に目をやっていうようだった。

「その剣を抜く気がないなら、さっさと西への道に入っちゃった方がいい。雨を凌げる大きな木や岩穴もあるかもしれない」

ウールジは玉蜀黍の麺麭と干し肉、それに傷薬を少し分けてくれた。

私は二人に礼を言い、森の際の家を出た。

八

街へ近づくにつれ、空には薄灰色の雲が広がり、空気には湿気が感じられた。本当に雨が降るのかもしれない。砦からの喇叭や太鼓の音も時折聞こえた。

雷が落ちた木というのはすぐにわかった。街外れの畑の中に二十メートル(約六メートル)ほどのところで折れた大きな木があつた。折れた先は槍のように尖って黒く焦げていたが、地面に近い方には緑の葉が茂っている。根本近くに道標なのか暗灰色の小さな石塔のようなものが傾いて立っていた。それは夢で見た森の中のものとよく似ているように思われた。

道はそこで二股に分かれ、右に行けば街、左に行けば畑を越えて森の中に通じていた。何かが起こるのかどうなのか、気にならないわけではなかった。不愉快な大公の顔も頭に浮かんだ。だが、私はサンジェリィへ帰るという旅の目的を思い起こし、左の道へ進んだ。

さして歩かないうちに、私はその道を行く機を逸したことを理解した。畑の向こうで森がうねっていた。木々の梢が大きく揺れ動き、葉叢の騒めきは無数の人々の騒ぎ立てる声のようだった。

森の中からたくさんの生き物がこちらへ向かってくる。枝分かれした角を振り立てた大鹿、牙をむいた狼に狐、巨体を震わせる野牛に黒熊、洗熊や栗鼠など小さな生き物もある。空には鷲が翼を広げて舞い、無数の小さな鳥も飛び交う。地面を飛び跳ねているのは飛蝗だろうか。

足音、羽音、唸り声、咆哮、それらが入り混じり、大波のように押し寄せる。私は街の方へ向かって走った。畑にいた幾人かの人々が同様に逃げているのが見えた。

家並みのあるところまで走ると、私は路地に飛び込み、息を整えた。目の前を獣たちが走り抜けて行く。一瞬、何かに追われているのかと考え、一群が通り過ぎてから彼らが来た方を見たが、街外れの畑と森が見えるだけだった。

私は無数の足跡が残る道を経る中の方へと向かった。獣の咆哮と人間の叫び声が聞こえてくる。礫台のある広場が奇妙に霞んで見えた。

広場は土埃が舞い、血煙が上がっていた。大勢の大公の兵士たちが押し寄せてきた動物たちと戦っていた。兵士たちは皆を出て戦に赴くところだったのだろう、あちらこちらで黄色い旗印が揺れていた。立ち上がった熊が前脚でその旗竿をへし折り、そのまま兵士の頭を粉碎した。突進する野牛に吹き飛ばされ、二人三人の体が宙を舞う。大鹿の角が胴鎧を突き破り、はらわたをえぐり出す。何頭もの狼に食らいつかれた兵士が瞬く間に引き裂かれていく。舞い降りた大鷲が兵士たちの目や鼻を鉤爪でえぐり取る。

大公の兵士たちは思わぬ急襲に陥っていた。剣や槍を振り回して応戦するも、慣れない敵に苦戦する。敵は大きな獣ばかりではなかった。野鼠や栗鼠の群れに襲われて転げ回っている者もいた。土気色の顔で今にも倒れそうな男に巻きついてるのは毒蛇だろうか。

軍勢の馬たちも兵士たちに忠実なわけではなかった。獣たちの襲撃に驚いたのか、それとも彼らと意を通じているのか、竿立ちになって乗り手を振り落とし、後ろ脚で落ちた者を蹴り飛ばした。

ついに兵士たちは潰走を始めた。広場は十字路になっているが、そこか

ら北へ——皆の方へ——ばらばらに逃れ始めた。どこかで指揮官が「逃げるな、戦え」とわめいていたが、その声は大きな吠え声にかき消され、聞こえなくなった。森の獣たちは逃げる兵士たちを追った。

広場には無数の兵士の骸が折り重なって残された。獣たちの死骸は驚くほど少なかった。何頭かが新鮮な死肉をあさっていたが、ほとんどの動物たちは兵士たちを追撃していた。私は死体の間の血に染まった地面を歩いて、広場の北側に出た。

道は皆に向かって蛇行しながら緩やかに登っており、焼け跡の目立つ家並みの向こうに真新しい皆が見えた。堀と土塁、丸太を連ねた柵に囲まれ、櫓が幾つか建っている。大公の黄色い旗印があちこちに翻っていた。恐る恐るという様子で家から出てきた街の人々が、広場の惨状と獣たちが向かった皆の方を交互に見ていた。

私は皆へ通じる道を歩き始めた。逃げ遅れた兵士の死体が、ところどころに転がっていた。皆に近づくにつれ、同じ道を行く町の人々が現れ始めた。大方は年寄りや傷を負った者で、いずれも薄汚れた身なりをしていたが、目は真っ直ぐ前を見て光があった。鍬や鋤、大鎌を手に入れている者、倒れた兵士から奪ったらしい槍や剣を持っている者もいた。

ふと、振り返ると数十、いや数百の人々が皆に向かって足を進めていた。「邪悪な大公ゼクセナンを打ち倒せ。森と山に平穏を。聖なる木を大いなる森へ」

人々が叫んでいる言葉は山の上で聞いた言葉と同じものだった。私はどこかに白鷺党が潜んでいるのかとあたりを見回したが、それらしい姿はなかった。

皆が近づくに家並みが途切れ、作りかけの堀と土塁が畑を壊していた。鞭を手を普請を取り仕切っていた兵士たちが敗兵とその向こうの獣たちに驚いて逃げていくのが見えた。普請場の人々は何事が起こったのかわからず、立ちすくんだり逃げ出したりしている。

城柵の上では兵士たちが走り回り、慌てふためいている様が見えた。

「怯まず戦え。獣相手に何をしている。大公の兵士なら戦え」

櫓門の上から怒鳴り声が響いた。潰走する兵士たちは皆の中に入ることはできなかった。左右に逃れようとする者、振り向いて得物を構える者、門扉を叩き続ける者など、城柵の前で恐慌を来していた。

櫓門と城柵の上には兵士たちが矢をつがえて並んだ。もうすぐ彼らは矢を放つだろう。私は足を緩めたが、先を行く獣たちも街の人々も怖れる様子もなく、皆へ向かっていく。皆に守備隊がどれほど残っているのかわからないが、そう簡単に城柵を破れるとは思えなかった。獣たちと街の人々の死体が堀を埋め、土塁を覆うことになるのだろうか。

その時、背後から物音が聞こえてきた。馬の蹄の音と車輪の回るがらがらという音、そして大勢の者の走る足音だ。振り向くと街の方から軍勢が坂を駆け上がってくる。数百はいるだろうか。ところどころで青い旗印が翻っている。白鷺党の部隊のようだ。驚いたことに、甲冑を身につけた兵士たちに囲まれて見覚えのある鉄の馬車が進んでくる。

獣たちと街の人々は柵を囲む堀と土塁の前まで近づいていた。歩みは幾らか遅くなっているようだった。白鷺党はどんどん皆に近づいてくる。私は両者の間で立ち尽くしていた。

城柵の上の兵士たちが新軍の軍勢を指差し、何か叫んでいる。半ば金切り声の「放て」という声が聞こえ、同時に背後で扉が勢いよく開くような大きな音がした。

馬車の方に目をやろうとした瞬間、金色と薄紫の光が砦の方へ走った。光は大きな波のようになって、城柵の前に広がる。放たれた矢が光の波に弾かれて四方に飛び散るのが見えた。

またまたという大きな音がした。後ろを見ると鉄の馬車の扉はもう閉まっていた。

獣たちと街の人々は前進を再開した。もう一度矢の斉射があったが、光の波に弾かれる。だが、紫と金色の光は幾らか薄れているように見えた。

白鷺党の軍勢が私のまわりを駆け抜けていく。青い水流を模ったマヴァックの紋章を描いた甲冑を身につけている者もいるが、寄せ集めらしい不揃いの武具の者も多い。胴鎧だけの者、兜だけの者もある。

また矢が放たれたが、同時に馬車の扉が開き、二色の光が獣たちと街の人々を守った。扉が閉まるまでのわずかな間に、七角形の鉄の馬車の中に小柄な人影が見えた。

先頭に行く人と獣は土塁と堀を越えて、城柵の前に残っていた兵士たちとの戦いが始まった。砦からの矢と投槍は光の波が跳ね返した。

「よう、やっぱり戻ってきたのか。少しは気骨があるんだな」

声に驚き、振り向くとヴォルハンが皮肉めいた笑みを浮かべていた。マヴァックの紋章付きの兜を被っている。

「これはどういうことだ。何が起きているんだ」

「見ての通りだ。大公様のご命令通り、護送の仕事をやってるのさ」ヴォルハンは得意げににやにやと笑った。見れば、鉄の馬車の脇にはアプスタルの姿もあった。

「あの鉄の馬車をここまで引つ張ってくるのは一仕事だったぜ。隊長さんも仕事熱心だからな。大公様の覚えもさぞやよろしくなることだろうよ」「つまらん冗談はよせ。何が起きている。馬車の中にはカノートがいるのか」

「見てりゃわかるってことよ」

ヴォルハンが砦の方へ顎をしゃくってみせた。隊長が「前進」と大声で命じた。鉄の馬車を中心にして白鷺党の軍勢は皆へと動き始めた。私もまた何かに憑かれたかのように足を前へ進めた。戦いの行く末を見定めたいという好奇の心だったのか、あるいは別の力が働いていたのかはわからない。

土橋を渡って堀を越え、鉤型に曲がった土塁の間を抜けると櫓門の前には退路を断たれた兵士たちの死骸が幾つも折り重なっていた。肉食の獣たちにはらわたを引きずり出されているものもあった。

白鷺党には破城槌や攻城塔の用意はなかった。鉤縄が何本も城柵に投じられ、兵士たちが丸太の柵をよじ登ろうとする。中にはナーカウの民も混じっているのか、苦もなく柵を登って行く者もいるが、柵の上の兵士たちは縄を斬り払い、弓矢で狙い打ちにする。間合いが近過ぎると光の波はうまく働かず、次々と落下する者が出る。城門には野牛や熊たちが体当たりを繰り返した。巨体がぶつかるたびに門扉は震え、わずかに内側へとたわむが、そう簡単には扉は破れそうになかった。

その時、砦の東側の山から何かが聞こえてきた。鳥の声、獣の声、そして奇妙な人間の声らしきものが折り重なって山を覆う森から響いてくる。森がざわざわと揺れ動き、無数の鳥が飛び立つ。鳥たちは城柵で弓矢を構えている兵士たちに襲いかかる。

森の中から無数の矢が放たれ、城柵の上の兵士たちに突き刺さる。木々の合間からナーカウの民が姿を現す。次々に葛を握って宙を飛び、驚くべ

き身軽さで城柵に飛び移ると、斧や山刀で大公の兵士たちを打ち倒している。

私はこの戦いの様子をただ、見ていた。それはどこか夢現つのような、奇妙な光景だった。山の根城で見た焚き火の中の幻影の続きを見せられているような気がした。手には大公の兵士から奪った剣があったが、それを振るう気持ちは起きてこなかった。

幻を打ち破るような鋭い音が聞こえた。それは甲高い喇叭の音のようにも聞こえた。どこから聞こえてくるのか、首を巡らすと北の空に黒雲が沸き起こるのが見えた。黒雲の渦の中から白い長衣をまとった男の姿が現れた。黒と銀で縁取られた長衣姿の男は鈍い銀色の長い髪をなびかせ、宙に浮いていた。手には鉄色の杖を持ち、その先端には掌ほどもあろうかという紅玉が輝いている。銀髪の魔道士の姿は幻で見た姿よりもなお幻影のように感じられた。

破れ鐘のような声が響いた。

「レゲニアが動いたのはやはり陽動であつたか。留守を狙って仕掛けてくるとは、小癪な奴らめ。だが、これ以上好き勝手は許さぬ」

銀髪のゾルビアッドが杖を振ると、火球が走った。炎の玉は城門の前の獣たちを襲い、打ち倒した。熊や野牛の巨体が宙を舞って吹き飛ばされる。「カノートはそこか。儂の作った檻を盾にするとは考えたものだ。アズコックですぐに滅ぼしてしまえばよかったものを。見せしめにしようなどという大公めの浅知恵でこの体たらくだ」

次の火球が鉄の馬車を襲った。一瞬紫と金色の光が炎を弾くかに見えたが、それは能わなかった。燃え盛る火の玉は鉄の馬車を打ち、凄まじい音とともに七角形の鉄の箱はばらばらになって弾け飛んだ。

獣も人も誰もが動きを止めて、燃える馬車の残骸に目を注いだ。尋常の色合いではない青白い炎に虹色の火花が飛び散り、白煙が上がる中、うっすらと人影らしきものが姿を現した。

人影は二つあった。大きい方の人影が小さい方の人影を抱きかかえていた。燃え盛る炎を弾くようにして進み出たのはカノートを抱いたワムリサだった。

投剣使いの女はカノートを地面に横たえた。半ば焼け焦げたそれは人間の骸には見えなかった。焦げた部分には木目らしきものが見える。そ

れは精緻に作られた木彫りの人形のようなだった。

ワムリサは炎の中から現れたにもかかわらず、火傷も傷も負っていないようだった。乳色の腰布一枚を身にまとい、赤銅色の素肌に描かれた奇妙な絵模様は仄かな光を帯びて浮かび上がっているように見える。

「アズコックのカノートは失われた。今からは私自身が依り代となる」

ワムリサはそう言つて、宙に浮かぶ男を見上げた。

「戯けたことを。おまえのような小娘にこの森と山の精気を受け止める力があると思うのか」

「私はただの道だ」

ワムリサは静かに両腕を宙に向かって差し伸べた。風が地上から沸き起こった。木の葉が舞い、小枝が宙へと吹き上げられる。奇妙な風は銀髪の男へと向かい、男の周囲の黒雲を吹き飛ばしていく。

銀髪の男は杖を振りかざし、火の玉を放った。だが、それは宙で四散して地上へは届かない。男は二度三度と火球を放ったが、それは男のまわりを飛び交つてばちと爆ぜるだけだった。

ワムリサはゆっくりと両手を広げると、再び頭上に差し伸べるように動かした。私は腰に差したままだった剣がぶるぶると震えるのを感じた。体が震えているわけではない。剣が勝手に動いているのだ。

手で押さえる間もなく、剣は鞘から飛び出し、宙へと上った。その怪事は私にだけ起こっているわけではなかった。剣が、槍が、矢が、斧が、また鋤や鍬までもが、持ち主の手から離れて空中に浮かんていた。驚きと畏怖の声が四方から聞こえた。ひざまずいてワムリサの方を向き、何事か祈り始める者もいた。

宙に浮かんた数百の刃がその切っ先を銀髪の男に向けて一斉に飛んだ。ゾルビアッドは火球を放ち、飛んでくる刃を打ち払おうとした。炎は男の近くでは力を発揮して、向かってくる刃の一部は弾き返した。長衣の下には鎧を身に着けているのか、男の体に届いても跳ね返されるものもあった。

だが、数百の刃すべてから逃れることはできなかった。剣が、槍が、矢が男の体に突き刺さった。斧や鋤や鍬が宙で男の体を打ち叩いた。魔道士の白衣は血に染まり、恐ろしい苦悶の叫びが響き渡った。

ゾルビアッドは血の滴を振りまきながら、空を駆けるように砦の方へと逃れた。その後を何本もの刃が追ひ、また幾つかがその体を貫いた。血飛

沫を上げながら、銀髪の魔道士は櫓門の向こうに姿を消した。

九

宙を飛んでいた刃は櫓門の前に音を立てて落ちてきて、人々はそれを拾い上げた。

ワムリサはカノートの骸——なのだろうか——の側に立ち、両腕を広げて、歌うように声をあげた。すると、獣や鳥たちがそれに合わせるかのように吠え、唸り、鳴き声をあげた。それに人々の声が重なり、風音や木々の騒めく音までもが、その唱和に加わった。

もの皆すべてが奏でる楽の音のようなものが城柵の前に渦巻き、すべてを覆い尽くしていくようだった。やがて、奇妙な軋む音が砦から聞こえてきた。扉が軋むような音、木々が擦れあうような音が、幾重にも重なって響いてくる。

城柵や櫓門が少しずつ歪んで、蠢いているように見える。それは窮屈に縛り上げられた者が自由になろうと手足を動かしもがいているかのようだった。

唱和がさらに高まると、驚くべきことが起こった。城柵の円錐状に削られた丸太の先から細い枝が伸び始めた。枝が切り落とされた節から新たな枝が伸び始めた。城柵の丸太はあちらこちらでまるで脈打つかのように蠢いて、新たな成長を始めた。

地面に接するところが盛り上がり、太い根が地を割って現れた。新しい枝は急速に伸びて、鮮やかな緑の葉を茂らせ始める。そこかしこで丸太を縛っていた縄が千切れ、釘が弾け飛んだ。城柵のあちこちで隙間ができ、また歪んで膨らみ、隣り合った丸太が一つの太い幹になっていくところもあった。

櫓門の柱と梁は融合し、左右に太い枝を伸した二本の巨木となった。兵士たちが弓矢を構えていた櫓は無数の枝が絡み合った大きな籠のようなものになっていく。

門の歪みに耐えきれず、扉は大きく傾き、鉄の蝶番が外れて落ちる。二枚の大扉は地響きをあげて倒れた。その分厚い板からも幾つもの芽が生

え、枝が伸びていく。

私は白鷺党とともに、緑の拱門から砦の中に入った。鳥や獣、風と木々の歌声は低くなりながらもまだ続いていた。

城柵の中は奇妙な森が形を成そうとしていた。あちらこちらに見覚えのある建物らしきものの名残が見られたが、それは見る見るうちに何本もの木が絡みあった繁みに変わっていく。砦の中の兵士たちは東の森から侵入したナーカウの民と戦いを繰り広げていたのだろうが、この怪異に圧倒されて、呆然と育ち行く木々を見上げているか、ひざまずいて自分の神に祈っているか、あるいは新しく生まれつつある森の奥に逃げ込もうとしているかのいずれかだった。

ともに声をあげて不可思議な歌を歌っている者たちもいた。ここで働かされていた街の人々や近隣で捕らえられた人々なのだろう。

砦の中央奥に一際高く高い木がのびていた。何本もの巨木が絡みあい半ば溶け合うようになり、塔のような姿を見せている。一番大きな櫓——天守が変化したものと思われた。

巨樹の根元には大きな黒い空洞が開いていた。木の虚というわけではなく、寄りそう巨木の間に開いており、先刻までは天守の入り口であったところなのだろう。

その黒い入り口の上辺からは赤い血が滴り落ちていた。見上げると銀髪のゾルビアッドが礫になっていた。体には槍や剣が幾つか突き刺さっているが、彼の命を奪ったのは白衣を血に染めて胸から突き出している太い枝のようだった。

獣と人々の歌声が止んだが、砦の木々はまだ軋む音を立てて成長を続けているようだった。

「大公様、いかにおわします。ご命令通り、カノートを護送して参りましたぞ」

アプスタルの大音声砦の木々の間に飢した。

「これで私めの首を刎ねることはできますまい。首を刎ねられるのはお前の方だ」

アプスタルはそこまで大声で叫ぶと、あとは小声でぶつぶつと大公への罵詈雑言を続けた。

「大公め、どこに逃げやがった。残りの金子を支払ってもらおうか。ああ、

それと曾爺さんの仇も討たせてもらわにやらん」

ヴォルハンの声はいつもの軽口を叩く調子に聞こえたが、どこか芝居じみて聞こえた。彼らの心変わりには、果たして幻術に操られたものなのか、あるいは幻影が切っ掛けとなったものなのか、私にはよくわからなかった。白鷺党や街の人々が奇怪な森と化した砦に散っていき、大公を探した。逃げ遅れた近習が幾人か捕らえられたが、ゼクセナンの姿は見当たらないようだった。

「どこへ行きやがった。裏手にも一隊が回っているんだが」

ヴォルハンが苦い顔でそう言った時、天守だった巨木の上方で小鳥が一羽鳴き声をあげた。すると、何羽もの鳥たちが鳴き声の聞こえた太い枝へと集まり、盛んにさえずり声をあげ始めた。葉叢が揺れて、幾葉かがはらはらと落ちてくる。折り重なった枝葉の間にちらちらと黄色いものが見えた。

ワムリサは大木を見上げると、懷から短剣を抜き、鳥たちがさえずる葉叢へと投げ上げた。鳥たちが一斉に羽ばたき、飛び去る。短剣はきれいな弧を描いて飛んだが、葉叢近くで一瞬止まったかに見えた。それから獲物を狙う隼のように速さを増し、重なり合う枝葉の中に飛び込んだ。

短い悲鳴が聞こえ、黄色い塊が樹上から落ちてきた。幾度も途中の枝に当たり、葉と小枝を散らしながら、それは音を立てて地上に落下した。黄の衣を羽織ったゼクセナン大公は血まみれで、肩にはワムリサの短剣が突き刺さっていた。片足が奇妙な角度にねじ曲がっていたが、息はあるようだった。

隊長が進み出て、大公の側に片膝をついた。

「大公様、カノートを護送して参りました。途中白鷺党の襲撃を受けました故、少々遅参とあいなったこと、どうかお許しください。兵は皆奮戦し、馬車を守りましたぞ」

アプスタルはうめき声をもらして横たわる男にささか上ずった声でそう告げた。顔の傷がひどく赤らみ、血が噴き出しそうに見えた。大公は横目でアプスタルの方を見て、血まみれの顔を歪ませた。自嘲の笑いに見えなくもなかった。

何人かの者たちが半ば焼け焦げたカノートの《体》を運んできて、大公の頭の側に支えて据えた。何度見てもそれは木彫りの人形だった。燃え

てなくなった片袖からのぞく肩には、球形の関節があった。片方の目には硝子の義眼が入っていたが、焼けた側には黒い穴がぼっかりと開いていた。大公の顔からは歪んだ笑みが消え、強張って引きつった面持ちで言葉にならないうめき声をもらした。

「務めは果たしやったぞ、何とか言え、下種野郎」

アプスタルが剣を抜きかけたので、まわりにいた者たちが抑え込んだ。「まあ、まあ、隊長さんよ、こいつを殺したいのはあんなだけじゃあねえからな」

ヴォルハンが隊長をなだめながら、大公の側にしゃがみ込んだ。

「さすが大公様だ。ご立派ななりをしていらつしやる。ほう、この指輪は青玉、こっちは瑪瑙か。もうあんたにゃいらんもんだな。王家再興の足しにさせてもらうぜ」

ヴォルハンはゼクセナンの血まみれの指から指輪を二つ三つ抜き取って懷に入れた。

大公のまわりに集まった人々の中から、半裸の赤毛の女と黒髪の方が前に出てきた。二人は罵りながらゼクセナンの体を蹴りつけ、顔に唾を吐きかけた。大公は身を振ったが、顔にかかる唾を避けることはできなかった。聞き覚えのあるしわがれ声が聞こえた。

「生きておいでだね、くそつたれの大公様。安心おし、あんたの磔台はまだ広場に立ってるよ」

ウールジはそう言うのと、ひどくうれしそうに肩を揺らして笑った。「お前は西へ行ったんじゃなかったのか」

ワムリサがうめき続ける大公を冷たく見下ろしていた目を私に向けた。「そのつもりだったがね。成り行きというか、潮時を計りかねたというか、そういうことだ」

「まだ、お前は様々なものを見るところだ。カノートもそう言っていた」

ワムリサの黒い双眸が私を見据えた。その声が山の村で聞いたカノートの声に重なり、その瞳もまたカノートの黒い瞳に重なって見えた。胸乳を露にしたワムリサの姿が男か女かも定かでない子どものような姿に揺らいで見えた。

「お前の旅路だ。好きにするがいい」

我に返ると、半ば焼け焦げた木彫りの像を人々が運び出そうとしていた。ワムリサの姿はすでになかった。

私はそのまま砦を離れた。ラングードの街から振り返ると、砦はもう丘の上のこんもりとした森にしか見えなかった。

広場には白木の礫台がまっすぐに立っていた。それが使われるのを見届けることはせず、私はその足で西への道を辿った。